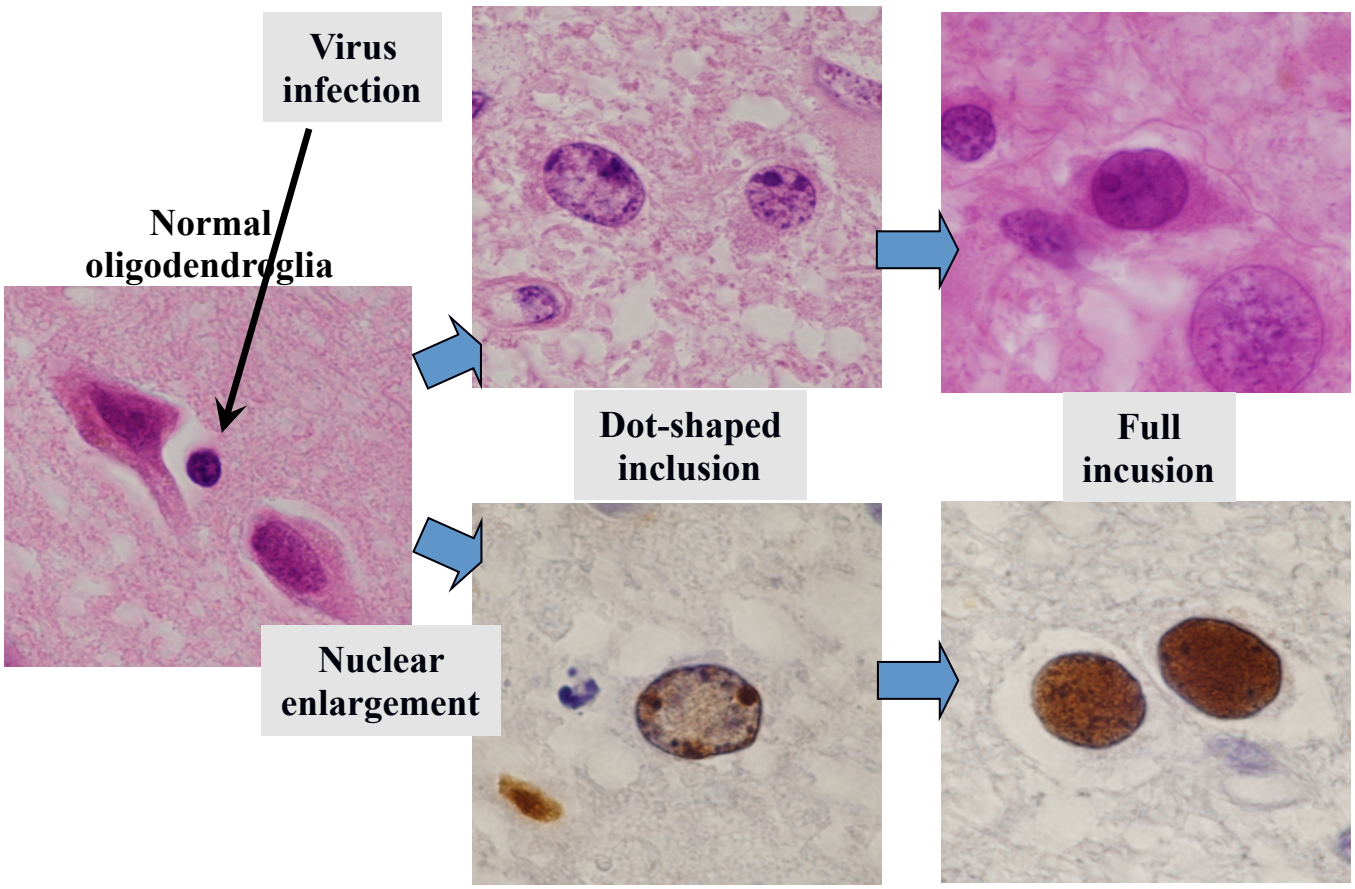
ドット状の核内ウイルス封入体は、早期診断を可能にする？

研究分担者：杏林大学医学部病理学教室　宍戸-原　由紀子



JCウイルスカプシド蛋白に対する免疫組織化学

解　説

1. 進行性多巣性白質脳症は、JCウイルス感染による脱髄疾患である。病理診断においては、腫大したグリア細胞の核内に見られるウイルス封入体の同定が重要である。

2. 近年、我々はJCウイルスがPML-NBsで粒子形成することを明らかにした(J Virology 2004)。これより、小型類円形核を有するグリア細胞は、まず核腫大し、ドット状の封入体(dot-shaped inclusion)を形成して、やがて核全体に広がる封入体(full inclusion)を形成すると考えられる。

3. こうしたウイルス封入体形成機序の解明は、進行性多巣性白質脳症の早期診断や辺縁病変での病理診断に、大きく貢献する。